

MOTTAINAI (もったいない)

クリスマスケーキ

クリスマスになると、いつも思い出す事がある。
確か、小学校1年生の時に、母に買ってもらった450
円のクリスマスケーキ。



当時、私は、わがままな子どもだった。例えば、
友だちが自転車を買ってもらった話を聞くと、決ま
って母親にせがんだ。「母ちゃん、自転車こうて！」
すると、母も「何で？」と聞いた。「だって、みんな
自転車持ってるもん」そして、母は、たたみかけて
「みんなって、誰？」と突っ込んできた。「えっと、
〇〇と△△と□□と…」と、口ごもってふくれっ面をするしかなかった。そんな
私に母は容赦なく次の言葉でいつも迫ってきた。「学校で必要なもんなら借金し
てでも買ってあげるけど、家（うち）には、今、そんなもの買う余裕はない。そ
んなことでふくれるんやったら、〇〇くんでも△△さんでも、□□さんでもいい
から、その家の子になっておいで！」私の完敗でいつも終わった。

そして、半年が過ぎて、1年が過ぎて、買ってもらえることもあった。その時
の喜びは、大きかった。

自転車も、忘れた頃に、3つ上のお姉ちゃんとの共用ということで24インチ
の自転車を買ってもらった。1年生の私には、大きかったが、とてもうれし
かった。日曜日ごとに古い下着で自転車を磨いた。

その年のクリスマス。まだ、家庭でようやくクリスマスケーキが一般的になり
始めた頃。「今日、お母さんがクリスマスケーキを作ってあげる！」満面の笑
みで宣言してくれた。私は、お店に並んでいるおしゃれなクリスマスケーキを期待
して夜を楽しみにしていた。母が作ってくれたのは、フライパンで作ったホッ
トケーキ。その上にバタークリームを載せたものだった。おしゃれなバラも飾り
もなかった。母も、子どもの期待を裏切ったようで、朝の笑顔はなかった。

しかし、この時ばかりは、何も文句を言わなかったように思う。

そして、翌日。お店に並んであるケーキが家に置いてあった。「母ちゃん、ど
うしたん」「買ってきたんよ」そして、次に出た言葉が、「なんぼしたん」「45
0円やった」ケーキの味はよく覚えていないが、「450円」と、とてもうれし
かったことを今も鮮明に覚えています。



そんな私が、どういうことか、教員をめざして大学で勉強することになった。教育史の講義で、今から250年以上も前に著されたルソーの『エミール』を勉強した。その中にこんな一節があった。「…子どもをだめにしようと思ったら、子どもが欲しいものを欲しい時に、欲しいだけ与えればよい…」確か、こんな事が書かれたあった。

私は、小さい頃の母から聞いた生い立ちを思い出した。

私の母は、大正13年生まれ、4才で父親を亡くした貧しい農家の出身で、尋常小学校しか出ていない。父親代わりの兄は、戦死。母の人生は、私が体験した苦労とは、深さが違うだろう。そんな母がどこで『エミール』

を勉強したのだろう。母は、一生懸命生きる中で、本当に大切なもの、大事なことをつかんできたのだろう。

そして、今日の日も、「行ってきます」の私の挨拶に、母からの声かけで始まった。「巧一。ハンカチ持ったか」「ちり紙持ったか」「もしもし(=携帯)持ったか」。今も、母は、私にとってのルソーである。

(平成20年天美西小学校のPTA広報 あすなろの原稿を加筆修正しました。)

「できない理由」ではなく「できる方法」を考える

先週は、「いい習慣が、いい人生をつくる」という雑誌から、ゴルゴ13のさいとうたかおさんを紹介しましたが、もうお一人、私がかねてより「この人、凄いな!」と思っていた、元全日本女子バレーボール代表キャプテンの竹下佳江さんの記事を紹介したいと思います。



竹下さんは、バレーボール選手としてはとても不利な159cmという身長で、ロンドンオリンピック銅メダルの立役者になりました。その竹下さんが、常にこだわり続けたこと。それは、「考える」こと。身長も不利、シドニーオリンピックでは、五輪出場をあと一歩で逃した際も「小さいセッターを使うから負けたんだ」と猛烈な避難を浴びました。

しかし、竹下さんは、「身長が低いから通用しない」ではなく、「身長が低くても通用するためには、どうすればいいか」、「できない理由」ではなく、「できる方法」を考え、常に「考えることから逃げない」人生を続けたそうです。

その竹下さんが、努力について、「世の中、がんばっても報われないことは、いくらでもあるでしょう。しかし、努力は必ず人生のどこかで『何か』につながる」と。そして、「考えながら毎日続けてきた練習、実践してきた考え方が」「現在の私」「未来の私にもつながっている」と。